

小樽運河を守る会関係資料

1973 年に小樽運河を守る会が設立されたことは、小樽を衰退しつつある商業港から保全と都市開発のバランスがとれた歴史都市へと転換するという都市アイデンティティの転換点となりました。1960 年代半ば、小樽運河を埋め立てて新しい道路を建設するという提案は市民の反発を引き起こし、影響力のある保存運動に繋がりました。地元の努力により最終的に運河の大部分が救われ、都市遺産の保存がコミュニティをどのように活性化できるかについて全国レベルでの議論が行われるようになりました。この運動のポスター、横断幕、ニュース記事、その他の道具のコレクションが小樽市総合博物館で定期的に展示されています。

衰退する街

戦時中、政府の規制により北海道の経済活動の中心は札幌に移行しました。かつて小樽が北海道経済の中心地であるという名声をもたらした銀行は撤退を始めました。そのころ、国のエネルギー需要の主流が石炭から石油へ移行し、それにより小樽は石炭の主要積出港としての地位を失いました。北海道の南東海岸沿いの他の港が東京へのより便利な輸送ルートを提供し、最終的に貨物輸送においては道路輸送と鉄道輸送が海運を上回りました。小樽の経済は停滞し、1950 年代半ばには「衰退する街」として知られるようになりました。

草の根の保護活動

かつて小樽運河を行き来していた小舟はゆっくりと朽ち、使われていない水路には沈泥が蓄積していました。古い倉庫の建物は取り壊すお金も補助金もなかったためそのまま放置されていました。1966 年、経済を活性化する取り組みの一環として地元政府は渋滞を緩和し港へのトラックのアクセスを改善するために新しい 6 車線の道路を提案しました。小樽運河埋め立て計画は運河を埋め立て、周囲の倉庫を取り壊すというものでした。これをきっかけに住民らが集まり「小樽運河を守る会」が結成されました。街中のショップ、カフェ、レストランには、失われる可能性のある建築遺産や文化遺産を強調した、小樽運河を小樽のアイデンティティの本質的な部分として位置づけるポスターが掲示されました。

運命を変える

守る会の努力は当初あまり成果を上げることができませんでした。地元政府は妥協する気がなく、ノスタルジックなシンボルとしての運河のみに基づいた保存への支持を得ることは全くできませんでした。しかし 1970 年代後半になると新しいアイデアを持った新しいメンバーが運動に参加し、運河と石造りの倉庫を主な資産として観光を通じて街を活性化する計画を策定しました。これは地元企業の支持を獲得しメディアでも広く注目されました。これが小樽経済発展のための地域運動となりました。1980 年代初頭、政府は運河の一部の区間を、道路を作るために狭くし、残りの部分に魅力的な歩道と街路灯を追加する計画に合意しました。現在、観光業は貨物をはるかに上回り、地域経済

の牽引役となっています。小樽の保存運動は運河以上のものを救ったのです。